土門辛聞

知事の食味批判発言で火を噴いた新潟コシＢＬ問題

従来コシでしか王者復活の道はなし

コメの王者、新潟コシヒカリ。３年前に「コシヒカリＢＬ」（コシＢＬ）なる品種に一斉切り替えしたことはご存知の通り。当初から食味の悪さを指摘してきたが、なんと新潟県の泉田裕彦知事までもが同じことを言い始めてきた。「従来コシとＢＬの違いが分かるんです、味」

これにカチンときたのが、コシＢＬ一斉更新を強行した新潟県農林水産部と農協組織。特に前者はコシＢＬ一斉更新強行による失敗の責任追及を恐れ、メディアを通じて知事批判をおっぱじめるなど大醜態をさらけ出している。

発言が飛び出したのは、昨年５月22日に魚沼コシの本拠地、六日町で開かれたタウンミーティング。会場には地域住民が１７０人も参加。この日のタイトルは「地域の魅力を創る」。パネルディスカッションのパネラーは観光関係の専門家ばかり。農業問題がテーマではなかった。

パネルディスカッションが終わりかけ、議事進行役の県職員が会場の一般参加者に質問を促したところ、塩沢町の生産者・笛木守さんがスクッと立ち上がった。

笛木さんは、有機米や減農薬米などを栽培して直接消費者に販売する「いなほ新潟」の代表者。３年前の一斉更新時から現場を無視した県や農協のやり方に不満を募らせていた。この日は日頃から抱き続けてきたコシＢＬへの不満なり疑問を直接知事にぶつけられると思いやってきた。

「17年から県はコシヒカリＢＬを一斉導入した。それで従来コシヒカリをカットしてしまっている。だけども私たち実際に（従来コシを）栽培し、また消費者の方々とコミュニケーションをとる中で、本当にやっぱり従来コシをくれという要望が非常に強いわけでして、決して私はＢＬそのものがだめだと思っていませんけれども、せめて生産者がＢＬか従来コシかを選択できる、その余地を作っていただきたい。今、我々が種もみを用意する場合には、長野県とか、富山県とか、福井からわざわざ取り寄せなければいけない。そこを何とか新潟県でも供給していただきたいというふうにお願いしたい」

温厚な性格の笛木さんらしい、抑制の効いた質問ぶりだった。食味にも触れなかった。それなのに泉田知事は予想外の答弁で応じたのだ。

知事発言の全容を知った筆者が最初に抱いた疑問は、発言直後の県職員の表情である。会場は一瞬シーンとなり、ついであたふたする県職員の様子がしっかりと見てとれたという。笛木さんのレポートである。

ところで知事答弁で着目すべきポイントは2点ある。第1のポイントは、質問者から聞かれもしないのに、「私も従来コシとＢＬの違いが分かるんです、味」と答えてきたこと。第2のポイントは「（従来コシの）ニーズすごく分かっていますし、一応県の中では選択できるようにしてあります」と述べた点である。

土門 剛　どもん　たけし

【プロフィール】
1947年大阪府生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆している。主な著書に、『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）、『穀物メジャー』（共著／家の光協会）、『東京をどうする、日本をどうする』（通産省八幡和男氏と共著／講談社）、『新食糧法で日本のお米はこう変わる』（東洋経済新報社）などがある。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。会員制のFAX情報誌も発行している。

まず第1のポイント。これを説明する前に泉田知事の人となりを紹介しておこう。同県加茂市出身の泉田知事は、京大法学部を出て旧通産省に入省したキャリア官僚。04年の知事選に出馬して初当選。自身のブログに「Ｂ級グルメ」との自己紹介がある。霞ヶ関官僚の在りしよき日には、大企業などによる一流料亭やレストランでのご接待を受けることが多く、泉田知事も若き頃には味覚については相応の研鑽を積んだと推測される。「Ｂ級グルメ」とは、かなりの食通が謙遜して使う表現である。それだけに「違いが分かります、味」発言は真実味が伝わってくる。

ちなみにコシＢＬの食味に対する県の公式見解は従来コシと遜色なしというものである。県のホームページにもＱ＆Ａ形式で「香り、つや、甘みは、従来コシヒカリと本当に変わらないのでしょうか？」の問いに対し、「変わりありません」の答えを示し、根拠を4点列挙している。それがいかにあやふやか、本コラムでも指摘したことがあるが、再度繰り返すと、お手盛りのアンケート調査や、手前味噌の食味試験データばかりで構成。唯一、第三者機関による食味評価と思しきものは財団法人日本穀物検定協会（穀検）の食味ランキングぐらい。とてもマーケットが受け入れるような代物ではない。

穀検は、一応、第三者機関というポジションだが、所詮は農水省の外郭団体。存在自体からして評価に限界がある。何よりも評価結果と実態の乖離がそれを思わせる。例えば、山形はえぬきなど10年以上連続「特Ａ」の評価を受けているが、価格は低迷したまま。しかも同じ「特Ａ」に魚沼コシがあったり、岩手県南産ひとめぼれがあったりで、市場での評価とは無縁のようだ。

県農林水産部の小役人には思いもつかないだろうが、穀検の食味検査には致命的な欠陥がいくつかある。最たるものが冷めてからの食味評価をしていないことだ。需要が外食や中食用にシフトしていることを考えれば、穀検の食味評価そのものの限界だけでなく妥当性も問われる。

次に第2のポイント、「（従来コシの）ニーズすごく分かっています」と述べた点だ。県の公式見解では、コシＢＬの作付け比率は97％（19年産）。県議会の答弁でもそう答えている。農林水産部によれば「種子流通量などから推計」と説明するが、この数字はデタラメもいいとこだ。

県稲作経営者協会の会長、副会長、前会長をチェックしただけでも数字のデタラメさが読めてくる。本来なら率先してコシＢＬに切り替えねばならぬポジションにある会長でさえ3年前の切り替え時点で半々の作付けだった。魚沼地区で大規模展開していた副会長はコシＢＬ１００％の作付け。その理由は魚沼地区の七不思議の一つだ。驚くべきは前会長。この方は逆に従来コシが１００％の確信犯。売り先のある生産者ほど従来コシに傾くという好例かも。

零細兼業農家は農協出荷用にコシＢＬ、飯米や贈答用は従来コシと、なかなか現実感に満ちた使い分けをしている（よって農協出荷のコメが売れなくなるのは当たり前か）。

筆者の直感による実際の作付け比率は種籾を扱う商人系集荷業者のヒアリングなどを総合して県全体で19年産は9割に近い8割台だろうか。集荷業者も同じことを言っている。20年産は従来コシの作付けが増え8割台前半になることは確実だ。

知事の「（従来コシの）ニーズすごく分かっています」発言は、農林水産部よりも現場をよく理解している証でもある。従来コシの作付けがわずか3％しかないというのなら、知事がわざわざニーズ云々と言及することはないという結論に達する。

農林水産部が従来コシの作付け比率を過小評価するのは、コシＢＬの一斉切り替えが大失敗であったことを隠蔽するための小細工だ。その延長線上には自らの責任回避という小役人的な保身術が見え隠れする。

筆者は以前に従来コシの作付け比率が3割台になれば、コシＢＬの一斉更新を強行させた新潟県農林水産部の県内各層で厳しく指摘されると予告していた。このペースで従来コシの作付け比率が高まっていけば、2年後には3割を突破するだろう。可哀想なのは、何も知らされていないコメ生産者。今もコシＢＬの批判論者に冷たい視線を向ける。

その意味で、県内に大きな影響力のある新潟日報の責任は重大だ。県農林水産部と結託してコシＢＬの事実隠しに躍起となっている。

新聞記者一年生でも知事発言はバリューのあるニュースと判断する。が、新潟日報はなぜか無視した。タウンミーティングがあった翌日の紙面には、その事実すら報じなかった。紙面に出たのは、翌々日の24日。地域ブロック版に掲載されたのは「学園都市出現に意欲」の見出しの50行ほどの記事。なぜかコシＢＬについての知事発言は取り上げていない。知事発言を黙殺する新潟日報の事情は見当がつく。コシＢＬ一斉更新に県庁や農協組織と組んで大キャンペーンを張っていただけに、いまさらコシＢＬを否定するトーンの記事は書きにくいのか、あるいは農協組織

に配慮して取り上げなかったか。地方紙の限界といえばそれまでだが、それにしてもお粗末過ぎる対応だ。

コシBLは「情報隠し」

新潟日報が黙殺した知事発言は半年後に火を噴く。昨年11月30日、コシBL問題で議会の答弁に立った知事が冒頭にこんな発言をした。

「担当部局との折衝の中でどこまで答えるか悩みながら席を立ちましたけれども、せっかくこういう場なので、本当に私がどう考えているか腹を固めてお話しさせていただきたいと思います」

懸命なる読者諸兄は、なぜ知事が悩みながら席を立ったかは、先に紹介した経緯を頭に入れていただければ、あえて説明の必要はあるまい。そんな前振りで知事は違った表現で農林水産部を批判した。

「コシヒカリBLを導入する際に、新潟県はどのような意思決定をしたのか。これは県議会も含めてだと思うのですけれども、コシヒカリBLという新しい品種にすべて付け替えて、さらにコシヒカリの名称のままにしましょうという選択をしたのです。これを消費者サイドから見たときにどう見えるのかと言うと、物が変わったのに名前を一緒にする、はっきり言うと情報隠し、在来種のコシヒカリとコシヒカリBLの違いを分からないようにして売ってしまう戦略だったのです…中略…それを消費者にとって分からないようにして売って市場から評価が得られると思ったのであれば、極めて認識が甘い政策だったのではないかと私は思っております」

ところが新潟日報は知事発言を歪曲した記事を掲載する。翌日付紙面には『情報隠し』BL米販売批判」の見出しで「泉田知事、県会決算委で異例の答弁」のサブ見出しをつけてきた。笑ってしまうのは「批判だけでなく実行重要」と知事批判を展開した、報道部記者のお粗末なコラム。この記者に言っておきたいのは、知事を批判する前に、大事な情報をきちんと伝えない自社の報道姿勢を真っ先に自己批判することである。

それはさておいて、この日の知事発言が契機となりコシBLの表示方法を改めることになった。従来コシもコシBLも「新潟コシヒカリ」の表示で販売してきた。知事は、コシBLは「BL」と表記するよう提案したのである。これを受けて県内の有識者と称する者を集めた検討会が開かれ3月26日の第3回会合で「BL表記は必要」と結論付けた。

詳しい表記方法はいずれ紹介するとして、これが「吉」と出るか「凶」と出るか。筆者の見解は「凶」と見た。対応が中途半端だ。問題は、表示ではなく、大事な食味なのだ。

たまたま3月初め、講演先で20年産コシBLを試食する機会があった。炊飯直後と1時間経過後を試食したが、後者の食味については思わずのけぞってしまった。

「へぇ、これがコシヒカリかい。冷めてパサパサならお握りや弁当には向かないだろうな」

会場にいた生産者も同じように頷いていた。もしコシBLと表記が義務付けられ、あのような食味ならば、新潟コシヒカリのマーケットでの評価は相当厳しくなるに違いない。

最近、新潟の生産者が筆者にこんなことを言ってきた。

「あなたはコシBLを批判するけど、すべてのことを知っての上か」

何のことかと聞くと、「コシBLはいもち病に強いので、その分、農薬を減らすことができます」と説明してきた。農林水産部がコシBL批判封じで農家に言わせている言い訳めいた説明を信じているのだろう。

「マーケットは、いもち病の農薬使用量が減っただけでは評価しませんよ。評価するのは食味だけです。コメの王者、新潟コシヒカリが食味を落とせば、それはただのコメ以下の扱いです。なぜ減反枠が拡大されたか、考えたことがありますか」と言うと、その生産者はポカンとしていた。県農林水産部、農協組織、新潟日報によるマインドコントロールから覚める気配はどうやらなかった。

「大凶」というシナリオも紹介しよう。今まで通りに表示せずの方針を貫く場合だ。いよいよ新潟コシヒカリのマーケットでの評価は総崩れになる。知事発言はそれを防ぐための警告であったと思えてならない。

最後に「吉」のシナリオも紹介しておこう。その前提はコシBLの作付けをやめさせることである。従来コシに再切り替えするしか生き残る道はないし、「吉」のシナリオも描くことはできまい。それには泉田知事による政治力の発揮が大前提となる。

コシBLへの一斉切り替えは県庁役人による新品種導入という功名心が先行したものである。彼らが忘れていたのは、何をどれだけ、どう作るかは、すべてはマーケットの御意に沿うことである。これは市場経済の鉄則だ。行政がなすべきは全力を傾けて新しい品種を開発し、マーケットに選ばせることである。コシBLへの一斉切り替えの失敗は、これを無視したことから起きた。新潟県農林水産部の責任は万死に値する。